

『気候適応の日本史：人新世をのりこえる視点』

中塚 武 著

農業・農村領域 研究員 日田 アトム



本書は、弥生時代以来の日本の歴史を「気候変動に対する人間社会の適応」という視点からとらえなおす、日本初の通史として執筆されました。過去数千年にわたる気候の状況を年単位で復元した気候変動データを利用し、歴史学・考古学の史・資料の知見と比較することで気候変動に対する日本社会の応答が考察されています。

最初に「古気候学と日本史の新たな出会い—プロローグ」では、本書の目的が示されています。第1の目的は気候変動という観点から日本史を全面的にとらえなおすこと、第2の目的は「気候適応史研究を地球環境問題に対応するための新たな戦略としてとらえなおす」こととされており、本書が壮大な目標をもって執筆されたことがわかります。

初めの3つの章では、論点整理と研究手法の解説が行われています。「地球温暖化と気候適応史の研究」では、自然科学の一分野である古気候学が歴史学・考古学と連携することで発達した「気候適応史」研究の意義が述べられます。「人間にとって気候とは何か」では、気候変動に対する人類の適応の可否は変動のスピード次第であることが述べられ、数年周期の短期変動、数百年以上の長期変動、そしてそれらの中間に位置する数十年周期の中期変動が人類に与えた影響が説明されています。「古気候データの世界と日本での急速な拡充」では、近年の古気候学の急速な発展や、古気候復元の手法及び史・資料との比較について概説されています。

続く3章が本書のメインの部分です。古気候データから把握される気候変動をそのスピードから長周期、中周期、短周期の3つに分け、これらの変動に日本列島の人々がどのように適応したのか考察されています。

まず、「長周期」変動への日本列島の人々の適応」で取り上げられるのは、数百年以上の長周期の気候変動です。日本列島への稲作伝来から江戸時代の金肥の利用まで様々な日本史上の出来事を取り上げ、これらに長期的な気候変動への適応という側面があることが論じられています。

次に、「中周期」変動への日本列島の人々の適応」では、10年から数十年間暖かい年が続いた直後に気温

が低下すると大飢饉が発生するという関係性が明らかにされます。その要因としては、数

十年にわたる温暖期という気候好適期に社会が過剰適応してしまうことや、数十年周期での変動は予測も対応も難しい時間スケールであることが考察されています。

続く、「短周期」変動への日本列島の人々の適応」では、降水量の激しい変動によって生じた水害や干害によって農業生産量が激しく変動していたことや、そうした生産量の変動によって価格変動も生じていたことが示されます。また、そうした水稻生産量の年々の変動に対して、江戸時代の人々が河川の浚渫工事といった取組によって水害を減らし、生産力を向上させた事例が紹介されています。

以上の議論を踏まえて、「気候と歴史の関係から何を学ぶか」では気候変動といった外的要因も技術・制度革新という内的要因も、人間社会に与える影響という点では同じ問題の構図をもっていることが論じられます。そのうえで著者は、SDGsが掲げられながらも経済成長と脱成長の議論に折り合いがつかないように見える現状において、両者が一步引いて「歴史に学ぶ」ことを提案するとともに、気候変動研究が役に立つと述べています。最後に、「人新世をのりこえる知恵蔵としての歴史—エピローグ」では、人新世をのりこえるために我々は人類史の知恵に学ぶべきであり、「その代表的なテーマが気候適応の比較史に他ならない」と改めて主張されます。

本書は、しばしば批判にもさらされる「歴史の研究を現代社会の問題の解決に役立てる」というアプローチに挑戦しているのみならず、歴史研究の学説を古気候データに基づいて検証するなど、内容は極めて野心的でありながらも、筆致は謙虚・冷静です。それだけでなく、一般の歴史ファンに訴求するために歴史書を中心とする叢書である「歴史文化ライブラリー」にて刊行するなど、様々な工夫が凝らされています。私のような一般の歴史ファンのみならず、積極的なアウトリーチ活動が求められる研究者にもお勧めできる一冊です。

『気候適応の日本史：人新世をのりこえる視点』
著／中塚 武
出版年／2022年
発行所／吉川弘文館